

東日本大震災が起こってから今月で7年、熊本地震から4月で2年がたちます。これまでの支援を通して、新たな関係が生まれている活動があります。被災した地域社会のニーズの変化に応じて、さまざまな方法で支援を続けているクラブがあります。

『友』では、東日本大震災のあった3月、熊本地震のあった4月の2カ月にわたってロータリークラブ・地区が行っている支援活動を紹介します。

「ロータリー希望の風」奨学生との懇談会を開催

ロータリー東日本大震災青少年支援連絡協議会委員長 地葉 新司（潟上RC）



2011年3月11日に発生した東日本大震災で両親もしくは片親を失った遺児たちが、大学、専門学校への入学から卒業までを支援する「ロータリー希望の風奨学金」の開始から6年が経過しました。

当協議会では毎年、奨学生にアンケートを取っています。これまでの回答では、被災遺児として、支援者と直接会って話すことに躊躇しているようでした。しかし回数を重ねるうちに、少しずつですが、支援してくれたロータリアンの皆さまに直接お礼を伝えたい、との回答を寄せられる奨学生も散見されるようになりました。そこで東京都を中心とした関東圏内の大学や専門学校に在籍している学生に懇談会への参加を呼び掛けたところ、4人の奨学生が参加してくれることになり、11月12日、懇談会を開催することになりました。

参加者の出身は福島県1人、宮城県1人、岩手県2人です。被災時、彼らはまだ中高生で「ロータリー希望の風奨学金」のことは、学校の先生から勧められたり、家族が調べたりして知ったそうです。

協議会からは、3人のロータリアンが出席しました。奨学生たちはロータリーという名前は知っていても、どのような人たちが何をしているのかを知るのとは初めてのことでした。ロータリーの具体的な活動を紹介しますと、驚かれたようで、若い世代の人たちや留学生、海外のロータリーとの交流に興味を示していました。また、これから社会人となる上で、社会人の先輩でもあるロータリアンとの交流にも興味を持ち、ロータリーの例会、地区大会への参加にも前向きな様子を感じました。

「ロータリー希望の風奨学金」以外の奨学金も得ている奨学生もいましたが、皆アルバイトしながら学生生活を送っています。「ロータリー希望の風奨学金」は、学費や生活費として、また自分自身のさらなる成長に費やす資金として大いに役立っていて、感謝しているとのことでした。

懇談会の終わりに奨学生たちに感想を聞いたところ、「ロータリーを知らずに奨学金をもらっていたけれど、いろいろ知ることができて参加してよかった。今後も交流を続けていきたいです」とのことでした。次につながる交流が持てたと強く感じました。

協議会としては、初めて奨学生の生の声を聞く機会となりました。これからはさまざまな形で交流を図っていきたく考えています。

最後に、この懇談会の開催にあたり、ご協力いただいた第2580地区ロータリー希望の風奨学金支援特別委員会に感謝します。（第2540地区2010-11年度ガバナー）

※「ロータリー希望の風奨学金」についての詳細は『友』2017年9月号横組みP36～39をご覧ください。